

仮名草子の読者をめぐる問題

——『薄雪物語』『可笑記』『烏籠物語』——

市 古 夏 生

近世初頭、仮名草子の時代になって、一見、小説や随筆類の執筆活動が活発になったかの印象が私にはある。確かに文学史では

織豊期の文学活動が低調であるとな一般的に見られているので、私の印象はこのような知識に端を発しているのであらう。仮名草子

は出版文化の成長と期を——にして展開していくが、出版部数が少部数であれ、出版の対象となったことで、現在に至るまで伝存する作品が少なくない。すなわち、出版というシステムを通すこと

によって作品の生命力が高まり、その成立時期や刊行時期がより明瞭になり、そのことが延いては執筆活動が活発になったと印象

づけられているのではないか。実状は文禄慶長から元和年間、そして寛永の一桁までは以前とそう変わらず、寛永九年以後あたり

から本当の意味で活発化するといっている。それはちょうど古活字版から整版に移行していく時期と重なる。本稿では出版文化草

創期の仮名草子における読者の問題を考察するが、出版物として

は『薄雪物語』『可笑記』等を材料とする。一方、この時期は写本がまだ十分機能していた時代でもある。総体的にみれば、版本

よりも写本の方が多く生産されていたのである。写本の場合にいつでも若干触れようと思う。

—

『薄雪物語』は成立年は明瞭ではないが、ほぼ慶長から元和頃にかけて成立刊行されたとみていい。周知のように該書は書簡体で構成された仮名草子である。冒頭と結末こそ地の文で物語は進行するけれども、それ以外はすべて闇部の衛門と薄雪との往復書簡なのである。清水寺で一目惚れした深草の住人衛門が薄雪に自分の思いを恋文で打ち明け、それを受信した薄雪が、「かみの木」がいるという理由で拒絶するというスタイルである。「かみの木」とは定まった男の意であるが、実はこの表現をどう捉えるかには問題がある。決った相手がいるとは、すなわち人妻ということに考えていいのか。あるいは言い交わした男がいるのかとも考えられる。さらに見方を変えれば、断る口実であったという可能性すら残されている。そういう見方が許容できるのも、「かみ

の木」と表現し、ひたすら拒絶する以外に、相手の影も形も見受けられないからなのである。薄雪に不倫を働く上での葛藤は、手紙の中ではあるとしても、衛門と結ばれてから、「かみの木」はまったくなかったのごとく収束する。ひたすら恐れるのは「二人の親」のことなのである。ここではその疑問を提示しておくだけにしておこう。

さて衛門は、相手のいる女性ではあっても、男が思いをかけたらその思いに応ずるべきであるとの主張を繰り返し、薄雪は「貞」を守ることの重要性を主張する。基本的にその主張の応酬が『薄雪物語』の内容である。衛門と薄雪によってまったく相異なる女性観が展開されるが、ただ主張を唱えるだけではなく、歴史的に積み重ねられてきた物語・説話の中から、それぞれの主張に見合うものを選んできて論拠とするのである。言い換えれば、作者が「情をかける」女と「貞を守る」女をテーマとして選び取ってきたといってもいい。その物語・説話は概ね知られたものばかりである。書簡は、初めは衛門が長々と書き、次第に短くなっていく傾向が強く見られる。薄雪は逆に最初こそすげなく断るけれども、その後次第に説話を交えながら情熱的に断るようになる。その書簡の長短の推移にも、薄雪の頑なな思いが氷解する過程を表出させているように思われる。

このような内容の『薄雪物語』は、どのような読者を想定して書かれたのであろうか。もちろん俄に解答しうる問題ではない。ただ何となく分かるような気もする。主人公の身分を考えてみたい。まず薄雪である。父は「さいさきいづみどの」で住居は「一

条殿の御うち」である。「二人の親」に衛門の存在を知られることを恥じているから、「さいさきいづみ」は一条家に入っているように思われる。すると薄雪は公家周辺に位置する存在といつていい。一方の「園部の衛門」は素性が明瞭ではない。深草の住人であって、近江国へ知人の病氣見舞に一月ほど赴く。これだけしか分からないが、文学的素養が認められること、といって「たにかげのうすゆき」の和歌を使った謎掛けを理解しなかったことなどを考えると、おほろげに武士階級を暗示しているように思われる。武士と公家周辺の女性との恋というと、「うらみのすけ」と同じである。いずれも初刊は写本に毛のはえた程度の量産シテムである古活字本での出版なので、まだ狭い読者範囲しか想定していないはずである。以上のように考えてくると、作者は身分が比較的高く文学的教養の豊かな武士や公家及びその周辺であり、当然読者も同様に想定していたのではなかったか。作者及び読者をそのように想定できるとすれば、『薄雪物語』を艶書の文範と考えて執筆したとは思われないし、そういうように読まれもしなかったにちがいない。『薄雪物語』は手本にするような見事な恋文ではないのである。書簡体形式を採用したのは飽くまでも趣向でしかなかろう。前述のように、「情をかける」女と「貞を守る」女をテーマとする説話と、二人の恋の行方を読ませるものであり、趣向として書簡を多用したということと思われる。

しかしながら趣向として楽しむ以外の読み方があってもいい。通常『薄雪物語』は艶書の文範という説明がなされている。これには証拠があって、早くから指摘がある。周知のものではある

が、貞享三年刊の西村本『諸国心中女』巻二の三に、

何の角のかきつゝけたる。皆うす雪の絵草子より覚たる文章。これに娘もうかれそめて云々（『西村本小説全集』上巻）

とあって、これは男が恋文を書くにあたつて、清水寺で見初める出だしから『薄雪』を借用したことを述べている。男が女に宛てた恋文の教科書とした例である。男が衛門の恋文を利用して、女性を口説く場合は理解しやすい。ところが享保二十年刊の江島其碩の浮世草子『咲分五人娘』巻二の一では

四番めの娘およつは。天性備つての遊女氣質。しかも顔だちよく。風俗自然としやれて。ぬぐい白粉つや、かに。首筋きよらにをくれをきらひてぬき揃へ。（中略）薄雪恋の文づくしを手本にして。ぬれ文を書ならひ。（『八文字屋本全集』13）

とある。こちらは娘が『薄雪』『恋の文づくし』を手本として、恋文の書き方を学ぶ例である。こうした読み方は、整版本が出版され幾多の『薄雪物語』が流布していく過程で、読者がその実用性に着目したということなのであろう。『薄雪物語』には形式面であれば書簡部分は一応形式的に候文体になつてはいるが、後の、例えば寛文元年刊『錦木』の如き文例集には見えない。にもかかわらず近世前期・中期の読者は艶書の文範として読めたのであろうか。おそらくは内容面で評価されたということにならう。しかも『薄雪物語』は単独で出版されたものだけでなく、元禄十三年刊『女世話文章』や正徳五年刊『女童子往来』の頭書に刻された例も報告されており、その本体は明らかに女性向けの書物である。『諸国心中女』のような例はあるにせよ少なくとも

元禄以降、本屋は女性の読者を見込んでいるし、それに付れて『薄雪』の読者は女性が多くなつたはずなのである。女性の艶書の手本となると、通常は衛門のものではなく薄雪の書簡が対象であらう。女性が積極的に男性に恋文を書く例は、おさんが女中のりんに代わつて茂右衛門に出す『好色五人女』巻三の二に見られるが、衛門の書簡を模倣して女性の恋文に転用することは有り得ないのである。

さて薄雪の書簡はひたすら、情熱的に口説く衛門への断り状である。恋の成就の書簡は「たにまのうすゆき云々」という謎掛けになつていて、他の女性が利用することは不可能である。ということは読者は男から口説かれたときに、承諾の返事を書く作法を学習するのではなく、断り状を学んでいたと考えていい。しかも相手がいる、といつて、貞節を尽す女性の例をあげながら断るのであろう。筆者は最近になつて、艶書の手本としての『薄雪物語』に疑問を持ち出したが、このように考えると、別に違和感はない。なお『薄雪』の影響を受け、文字通りの艶書文範となつている『錦木』にも、断り状を数回出して最終的に結ばれる文例があることを申し添えておこう。

以上のような性質の手本として認められるならば、当時の読者は何故そのような断り状を学ぶ必要があつたのか、という次なる疑問に達着する。人妻が男性から言い寄られた場合に『薄雪物語』を利用するためとは考え難いのである。実際に引用例によると、未婚の女性が読者となつている。拒絶を繰り返すにもかかわらず、衛門がしつこく口説いて最終的に恋を成就させていること

を重視したい。拒絶を繰り返すことによって、いつそう男性が恋心を募らせるテクニクとして『薄雪物語』を学んでいたのではなかったか。定まった相手がいるとして貞節を守ることを主張することによって、男の恋情を一層かき立てるということである。拒絶しながらも最後に結ばれるという構図は、拒絶することの意味を転化させる。

近世の読者の読み方がそうであれば、実は『薄雪物語』における薄雪の場合はどうであつたのかと逆に思つてしまふ。すなわち、薄雪にも本当は相手がいなかったのではないかという点である。最初に少し述べたように、ただ相手がいるといつてひたすら拒絶しているだけかもしれない、という見方がクローズアップされてくるのである。あまりにも定まった相手の存在感が希薄であることが背景にある。憶測を重ねているのでこれ以上は触れないが、『薄雪物語』の主題にもかかわる課題かと思ふ。⁽²⁾なお、宝暦年間頃の大坂の書肆大野木市兵衛の蔵板目録『宝文堂蔵板豫頭目録』（家蔵）には「うすゆき物かたり二冊」として、『薄雪右衛門』の事をくはしくよみ本にす、女いましめ草文尽」とある。ここでは女性向けの読み物とするところは同じであるが、教訓書及び書簡集として捉えていることを付け加えておこう。

二

古活字本で出版文化が活性化した後、再び整版本の時代に突入した寛永中期ごろから出版界では随筆が持て囃されるようになった。寛永十五年に朝山意林庵作『清水物語』という問答体を使用

した啓蒙性、批判性の強い仮名草子が出版される。『清水物語』が一、二年の間に二、三千部を刊行したベストセラーであり、それに反応した『祇園物語』『大仏物語』が出現させたことは、文学史的常識となっている。それと同時期の寛永十九年に如儡子作『可笑記』が出版された。成立は序文によれば寛永十三年のこと、写本時代があつた仮名草子なのである。これまた読者に受け入れられた。初版十一行本とその覆刻本的な十二行本、それとまったく別の無刊記本と万治二年刊の絵入り本の存在は、『清水物語』同様のベストセラーであることを示している。さらに本文そのものに評判が付加されている浅井了意執筆の『可笑記評判』が万治三年に刊行されてもいる。

それでは如儡子はどういうような読者を想定していたのか。写本時代があつたということは、出版行為を前提にした著述ではないということになろう。自己の周辺にいる人々を読者圏として考えていたとするのが自然であろう。すると如儡子は最上家に仕えていた牢人で、江戸などを浪々していたので、牢人仲間等を考えている。確かに牢人を含めた武士階級への教訓は少なからず見られる。主君の在り方、出頭人、奉公人など、さらに牢人払いの法度まで、牢人の憤懣まで言い募つて、武士階級へのメッセージを強く感じるのである。ところが武士以外の人々も対象になっている部分は多く、人間としての在り方を説き、また笑話・逸話など混じえるなど、町人階級でも十分に読める内容になっている。⁽³⁾それは浪々して得た体験・経験を元にしてこそ書き上げられる教養的な内容であり、面白さといえよう。事実、武蔵国川越の町人榎本

弥左衛門は、正保二年二十一歳のときに『可笑記』を読んでいた。⁽⁴⁾

『可笑記評判』跋文によれば、了意は寛永十四年に京都に百余日ほど寓居した折に写本を読み執筆したものという。その記述を信用するとすれば、ごく早い時期の読者の一人ということになる。しかしながらその記事を鵜呑みにするのは極めて危険であり、むしろ刊行時に接した時期に執筆された可能性が高い。⁽⁵⁾ 注釈や批評を書物するのは、対象作品がよく流布している場合であろう。古典を対象とするならともかく、世に出されたばかりで作者もよく知られていない写本を対象に評判を繰り広げる意味はないのではなからうか。そして正保二年出版の『梅草』に言及している箇所(巻二の三)など、どう見ても寛永十九年以後でないと思えない記述もある。野間光辰氏が写本時代の『可笑記』を読んだ可能性を強く示唆され、刊行時に手を入れた場合も否定できないけれども、恐らくは通説のごとく写本ではなく刊本で普通に読み、そして本屋の要請によって著したものであろう。了意は批評を付した新たな『可笑記』の提供を目論んだのである。いずれにしても『可笑記』各条を精読した読者の一人が了意であったことはまちがいない。了意は自序で

上に天下国家、王侯大夫の、世をとりおさむる道をしめし、下には村里茅屋、田夫野叟の、身をたておこなふ理をあらはす、その中に、たれとはなしに、大名かう家、家老、出頭、侍までも筆にまかせて、叱り耻しめ、天下国家の貴賤上下、この書の作者の心になはぬとて、いきどをり思へる

心、すでに筆端にみゆ、是なることは是にして、非なることは非なる事共すくなからず、

と語っている。武士階級向けの発言だけでなく、すべての階層に向けた普遍性を持つ書物として捉えている。しかも憤激までも読み取っていて、すべて肯定するわけではなく、是々非々を貫いて評を加えたのである。実際に『可笑記』は世間によく流布し、万治二年には絵入り本の出現までみていたことは既に記したが、そこに『徒然草』における『野槌』『なぐさみ草』のような類の、同時代の書物としては異例な評判書を出す意味があつたのである。後に『元禄大平記』で都の錦は「むかしより今にいたりてみざめせずしておもしろき物」として、『伽婢子』とともに『可笑記』を挙げているのはその証ともなり、読書案内をされている『元禄大平記』の読者は『可笑記』の存在を強く認識したはずである。そこで了意や都の錦のような知識人や作者が興味を持つ書としての『可笑記』が浮かび上がってくる。了意は批評するだけでなく、作者として『浮世物語』を執筆する際には、『可笑記評判』を撰取していることが諸家より指摘されている。間接的ではあるが、『可笑記』を自己の作品の中にまで取り込んだということである。近世中期になつて『可笑記』の板権は大坂の本屋吉文字屋市兵衛が所持していた。明和安永期の吉文字屋版の巻末に付された販売目録には、「人のをしへに成へき事をおどけまじりに書、絵入五冊」と『可笑記』の内容を紹介し、その次の項目には「続可笑記 絵入五冊」とも記されている。さらにその次には「浮世物語 絵入五冊」とあつて(明和十年刊『渡辺秘鑑』巻末、

実は『続可笑記』は『浮世物語』の改題本で、同一時期に共に販売されていた。この事実は『浮世物語』を『可笑記』の続編として販売しうると本屋が見ていたこと、この時期に『可笑記』のネームバリューがまだあったことが確認されるということになるう。

『可笑記』を取り込んだ作者は了意だけではなかった。作者未詳の『一休諸国物語』は趣向をほとんどこらすことなく、ストリートに『可笑記』を利用している。他に『因果物語』『沙石集』なども典拠として指摘されているが、ここでは『可笑記』の説話性、笑話性の面白さに着目して一休の滑稽譚に仕立て上げている。一休像を『可笑記』と結び付けたのである。もちろん後続の西鶴が『可笑記』の読者であったことは言うまでもない。

三

仮名草子は基本的に版本を主とするが、まだ出版文化の草創期、写本も十分に機能していた時代である。怪異小説『あやし草』のように写本のまま過した作品、了意の『狂哥咄』に利用された『遠近草』のような例もあれば、さらに前述のような写本時代を持つ仮名草子刊本はその例に事欠かない。そこで本節では写本『烏籠物語』について紹介しつつ、読者の問題を検討してみよう。彰考館蔵で写本一冊、近世前期の写しで、あるいは原本なのかもしれない。そのオモテ表紙見返に小山田与清の発言として、

此書寛永中の物也。中に椿流行の事見えたるに、百椿集の序に寛永中のよしあること云々

とあって、寛永年間の成立としている。確かに本文中には、

近來世間の椿をみるに、何ほと早咲の木とても霜をよけ、雪をはらひ、かね／＼手入なければ、早く咲ず、ふさたにも一兩年は前かとの余薫あれば、はやき事もあれば、次第に遅きと見えたり。根本早咲といふ木なし。

と見え、椿の早咲に世間が関心を持つている時期の所産であり、それが寛永年間というのは当たっている。例えば『清水物語』巻上には、

此比椿の花のはやるやうに付ても。聞もをよはぬ見事なる花あまた。あなたこなたより出たり。人このむ人ありてはやり候はゞ。おもしろき物もありなんかし。

と記されている。⁽⁸⁾その他にも、太閤秀吉の高麗を望んで攻め入った記述も見受けられ、寛永年間という成立はまず疑問の余地がない。本書は問答体の仮名草子である。場所は京都、不断病者の「瘦男」で初心なる男が「浮世のかたはしをも少しはひねくり廻したる拈線男」に誘われて、清水寺に参詣し、その帰途に祇園の荷茶屋に立ち寄る。そこで最初に辿りに見える華やかな出で立ちの若衆、次に連歌俳諧・茶の湯などをしつつ長崎商いなどの情報交換をする中老衆、そしてまったく隠居した法体老人について「拈線男」が各々論評を加える。その後は「瘦男」が質問を発し、「拈線男」が答えるが、夕刻時分に通り掛かった「所化坊主」に飲酒を強いて、そこから「拈線男」の問いに坊主が答えるという構図をとる。飲酒の善悪、「巧みての悪と善事」、「先業限あり、なし」の論などを展開させる。問答体の枠組を採用し、初心な男

と浮世に慣れた「拈繰男」との問答、俗人である「拈繰男」と俗に理解を示す「所化坊主」との問答を通し、前業にまつわる因果、多生輪廻、主人・師匠・親への恩、友人、美麗、媚諂い、飲酒の功罪を説き、読者を教化するのである。そこには仏教的色彩は認められるが、この時期の随筆類に見られる、世を批判し諷刺する姿勢はほとんど認められない。

あまり知られていない作品と思うので、簡単ではあるがざっと内容を紹介してみた。椿の流行のこと、問答体という形式を使いつつ教訓するスタイルのことなどから考えると、寛永十五年の『清水物語』刊行以後の成立としていいのではないか。巻末に

去人、此草紙をみて言葉賤しく心ちやつに似たり。面白き事はさておきぬ、おかしくもなしと申されし。依て此物語の名とす。

とある。「ちやつ」とは様子、すなわち集子を盛る器で底の浅いことから、浅さの比喻表現として使われている。言葉が卑しく内容も浅いと評され、その言辞をそのまま収録しているのは、謙退の意が認められよう。仏学をやや心得ている知識人の手になるものであるが、写本とはいえ、対読者意識は十分にあった。「瘦男」「拈繰男」「所化坊主」という三名の人物を登場させ、当時の流行に触れながら啓蒙・教訓を展開させている。特に飲酒論には笑話も交えている。テーマを掲げてストレートに主張を読ませる方式を採らず、あえて小説的枠組みを設定しているのである。それは読みやすさ、親しみやすさを考えたからに他ならない。それにもかかわらずこの書の場合、近世初期からずっと流通しなかつ

た。すなわち読者は、作者周辺を除いてほとんど獲得できなかったといっている。『国書総目録』によれば、彰考館の他に慶大本の存在を記載しているが、誤記のようである。あと宮内庁書陵部の静幽堂叢書所収本のみであり、伝存がほとんどないこともその証左となるが、また寡聞ながらこの書名に触れた文献を知らない。かつて近世考証随筆の中に『烏籠物語』の名を見、そのことは筆者の記憶に残っているが、遺憾ながら現在その書名を明らかにできない。作品としての力がないと言えはそれまでであるが、読みにくい部分があるにせよ、この当時の教訓仮名草子として見劣りがするわけではない。本屋等の周辺での読み手がいなかったことが災いしたのではなかったか。となると出版文化の時代へ移行しつつある時期、出版の力の大きさを改めて感じざるを得ない。

かつて筆者は『目覚まし草』の成立過程を考証し、刈谷図書蔵『無名冊子』がその原本になることを発表したことがある。作者未詳の『無名冊子』から神宮文庫蔵写本の『目覚まし草』となり、更に推敲されて刊本が出現したという説である。恐らくはある段階で公家衆などの文化人に渡り、そこから出版界に流出したものである。『無名冊子』自体は当代批判を固有名詞を入れて単刀直入に展開する部分に面白みを感じられはするものの、文体という表現力という稚拙の部に属する。刊本は文体や表現に読みやすさは図られたが、その一方批判の刃はまったく鈍化したといっている。修正を施した人物は読者でもあるわけで、固有名詞を付した具体的な批判を適当ではない、と読み取ったのであり、

そうした判断のもとでの修正なのである。それは原作者の意図を変更したことになるが、そういう改変作が版本として流通することによって作品に生命力が与えられたのである。少なくとも『烏籠物語』は、いつの時点かで彰考館の書庫に入り、以後与清以外の読者に恵まれなかったといつてよからう。

四

ここまで刊本から古活字版時代の『薄雪物語』、整版時代の『可笑記』、そして寛永年間の写本『烏籠物語』を対象として読者に関わる問題について触れてきた。いつの時代にあつても作者は読者がある程度予測しながら作品を執筆していたはずである。近世初期は写本時代から出版文化の時代への転機となる時期であり、まだ不特定多数を対象読者とは考えにくい。著者周辺をまず読者と想定し、その後の読者圏の拡大ぐらいは予測していたと思われる。出版文化が進展すると本屋自体が購買層を予測するようになったかもしれないが、それはそれで作者にある制約を課していたにちがいない。次に引用するのは『志賀随筆』の一節である。^⑩

さうしをみ、まひなどをきくに、き、て、みて、みとをりあり。たとへばまひなどに、むさし房辨慶その日のいくさに、大なぎなたのさやはづし、うでのちからはおほえたり。長刀のかねはよし、くきながにおつとりのべ、にしからひがし、きたからみなみ、くもでかく縄十文字八はながたといふ物に五十八人きりたをし、大勢に手をおほせ、東ざいへばつ

とおつちらし、なぎなたかたにうちかけ、ゆらり／＼のいたりけりといふ所を、いかにもそこからまことにして、た、今のやうにおぢおの、く心する人、下のき、てなり。又いかに辨慶大剛のものなればとて、ひとりして一日の中に五十八人きらん事おもひもよらず。まひはみないつはりなりなといふ人、これ中のき、てなり。上のき、てはおもしろくあはれる所をば、こ、は偽なり、た、けふのなくさみにきくぞと心得、又まことのうそ、うそのまこと、うそのうそなく、かく色々あるべし。そのあぢはひをあたまをかたふけ、よく分別し聞人、これ上々のき、てなり。かやうにみとをりあると、人の仰られし。げにもとおもひ、けふかきつけ待めり。

この書も写本しか存在しない。作者は未詳、慶長四年の成立で四十段ほどの随筆である。近世を通じて触れた文献を知らない。引用文では見物、読者には三通りあると説いている。幸若舞曲なので見物の例ではあるが、読者を考えるとき大いに参考になろう。合戦の武勇を振るう場面を真実として「おぢおの、く心」の人は下の聞き手。その場面を「おもひもよらず」「みないつはり」とするのは中の聞き手。虚実ないまぜをよく知り、作品を味わう人が上の聞き手とする。そして偶々例示が聞く方面だけであつて、草子を読む場合も同じと考えている。読者には三通りあると教えられ、少なくとも『志賀随筆』の作者はそのことを念頭に置いて書き進めていったことはまちがいない。読者の階層ではなく、読書の質の問題となるわけであらう。読者によって読み方が異なるというのは、現代の我々のことを想定しても当然のこと

である。近世社会でも同じことが起り得るし、また一つの読み方しか有り得ないという方が不自然であろう。『薄雪物語』を艶書の手本と読むことも一例であるが、かつて浅井了意の「伽婢子」の読まれ方について触れたことがある。^①『剪燈新話』を剽窃したと指摘する石橋生庵という医者もいれば、歴史上の事実と思い込んだ「北越軍談」の作者や「色道大鏡」の著者藤本箕山もいた。生庵の場合、日記中での指摘なので簡単に剽窃としか書かれていない。真意は不明ということになるが、ただ剽窃との指摘だけでは、作者の意図や趣向をあまり評価していかないのかもしれない。これは中の読者ということになる。これに対して事実と思いい込んだ箕山などは下の読者であろうか。

以上、仮名草子の対象読者、そして最後に読書の質について触れてきたが、あまりに雑ばくなことに終始し、本特集の課題に对应していないことを畏れる。ご寛恕をお願いする次第です。

注(1) 松原秀江「薄雪物語」版本考」(『薄雪物語』と御伽草子・仮名草子)所収、平成九年

(2) 松原秀江「薄雪物語」もののあはれ」(前掲書所収)は薄雪を貞女としての性格ともののあわれを知る賢女を合せ持つ女性とする所論を展開しており、本稿とは次元を異にするが、参考にすべき分がある。

(3) 花田富二夫「評・注の文学——『可笑記評判』を中心に」(『仮名草子研究』所収、平成十五年)など参照。

(4) 野間光辰「浮世草子の読者層」(『近世作家伝攷』所収、昭和六十年)。

(5) 前田金五郎「浮世物語」雑考」(『国語国文』昭和四十年六月)、田中伸・深沢秋男・小川武彦「可笑記大成」(昭和四十九年)など。無刊記本に拠っていることが指摘されている。

(6) 野間光辰「了意追跡」(『近世作家伝攷』所収)。

(7) 岡雅彦「一休俗伝考」(『国文学研究資料館紀要』四、昭和五十三年三月)。

(8) 元和寛永期における椿の流行に関しては「嬉遊笑覧」巻十二に仮名草子・俳諧を資料とし、また森末義彰「近世初頭の京都における椿愛好」(『百合女子大学研究紀要』6、昭和四十五年十二月)では「時慶卿記」(『資勝卿記』などの諸資料を駆使して、詳細である。

(9) 拙稿「目覚まし草の成立過程」(『近世初期文学と出版文化』所収、平成十年)。

(10) 京都大学文学部類原文庫蔵。薄い用紙に透き写した写本一冊。他には天理図書館蔵「たにのうもれ木」も同一の書。写本一冊。もとは佐佐木信綱の竹柏園文庫旧蔵。原本を閲覧していないが、『竹柏園蔵書志』によって本書と同一書なることが判明する。いづれも本文に拠った仮題である。

(11) 拙稿「伽婢子」における状況設定」(『近世初期文学と出版文化』所収)。